

# 新岡垣風土記

第452回

## 山田村大庄屋 秋武五八郎③

岡垣歴史文化研究会 羽山 健一

〔秋武主水正重氏の墓所〕

山田秋武氏初代・主水正重氏のお墓は、秋武本家に隣接する清石山宝樹院弘増寺（浄土宗）の裏山にある。納骨堂の裏から階段を上ると、右側に本家の墓地がある。手前に秋武家累代のお墓があり、奥に古いお墓が3基並んで建っている。中央が主水正重氏のお墓で、向かって右側に次男の利兵衛重光（初代の大庄屋）、左側が孫の七右衛門重利（2代目大庄屋）のお墓である。主水正重氏は、慶長19（1614）年7月23日に死亡しており、戒名は自性院殿本誉宗源居士となっている。元は一國一城の主である主水正重氏に、ふさわしい戒名である。

昭和44（1969）年1月発行の町報『岡垣』に、当時の宝樹院住職・内本法麟氏が「宝樹院由来」を記されている。秋武氏に関する部分を紹介する。

当院の裏山に大庄屋秋武主水の正重氏及び、重光重利三方の墓あり。播磨の国の武士にして知行武万参千石（秋武家は、元来、伊予に於て六万石の城主たり）関ヶ原の戦に石田三成の軍を激敗した。其の功や大なるも心に充たざる点あり。黒田長政公のすすめに依つて福岡に來り黒田公の食客となる。その後、長政公の再三従属懇望にも耳をかさず、礼を厚うしての子孫迄幟を立てさせなき事を誓い辞退す。長政公の御下知を以つて、大庄屋として当地に宿居する事となる。以来、当院の大檀那となり、当院の興隆に努めらる。（以下省略）

〔古文書は2度の火災で焼失〕

秋武五八郎が郡役所に提出した元文2（1737）年の「先祖書上」で、福岡藩主・黒田長政から拝領した屋敷や田地の証文は、56代以

前の火災で焼失したと述べている。また、別の文書では元禄期以前の火災としている。この時、秋武氏は先祖伝来の古文書を焼失したのである。

また、『秋武文書』を調査すると、江戸中期から昭和初期までの、膨大な文書が保存されている。だが不思議なことに、代々の経歴や事績に関する文書が極端に少ないのである。そこで、現当主・秋武光男氏への聞き取り調査を行い、私蔵文書などを閲覧させていただいた。その結果、重要文書欠落の原因が判明したのである。

第16代当主・秋武五八郎鶴松は、慶應義塾大学を卒業後、種々の事業を興すも成功せず、家産を傾けた。そこで、心機一転再起を図り、樺太へ渡るのである。大正6（1917）年10月、渡航に当たり、万一に備えて貴重な文書類を信頼する親族に預けた。ところが数年後、預け先が火事で全焼し、文書は灰燼に帰すのである。鶴松の保全行為が裏目に出た、残念な事故である。その時の「預り証」を紹介する。

### 預り証

- 一、系図 一本 巻物
- 一、巻物 二本
- 一、御書類
- 一、履歴書類
- 一、中洲 真筆

一、脇差 二刀  
右正二請取預り置候也  
大正六年拾月廿日  
〇〇  
〇〇〇〇

### 秋武五八郎殿

中洲は、漢学者で東京帝国大学教授の三島毅であろう。二松学舎を創設した人物で、号は中洲である。

※「預り証」の紹介文中、伏字を「〇」と表記しています。



▲秋武五八郎が親族に文書類を預けたときの「預り証」